





惣丁数二百六十五枚

六十二葉

傳史
日本武士道

千代女ハ加賀の松任の人めて幼きより風流の
志ありて俳諧を嗜^む志かれど其師を得ず
れかれ行脚の人と問ひし美濃の靈元坊を称
するふと皆同ト云せよよりて殊更ニ行きて學
む^むと思ひし折^りル靈元坊行脚して加賀ニ
来りしうをその旅宿ニ就^きて相見^むふとを請ひ
志を述ぶ靈元坊草^た跡^ひきたりとして寐てあ^らし所
なりしがさらむ一句せよといふ初夏の比たれ
は時鳥を題とすやうて句を吐きしるは坊ル々
のたゞものならざる氣韻を見てその句をうけ

かゝるは是れ誰れすべし所なりといふさうで
とて又一句を吐くふは肯がしざるふと初の如
し坊ハ眠れ就けとも女ハなほ去らざるして沈吟
しその眼の覺めあるを伺ひてハ又一句を問ふ
かゝるて数句を及び終つて曉天を及べる時坊起き
てよるを去らざりし夜ハ明けし如と
驚く時又千代女はとくききしとて明けしけ
りといへるを大に賞志しきなりし汝他日此
意地を忘る事なれば名天下に振るむとて師
弟の約をなせり千代女後果して女流のめづらしき此

道の高名に至せり 續近世畸人傳

廣瀬才二ハ伊藤東涯の門人なり人とたり人立
して清操あり家極めて貧しく獨居して糧盡き
油ふきに至らんとあれど憂へずかく貧しきを
ど或時梅道人の画書を見て頗る渴望し人々金を
借りて辛うじて買得たり然るに東涯先生ハ
此を見て大に歎賞せられしハ明の日たゞ
にこれ先生を奉せり人その意を問へば吾
欲する人の欲するも同し事なれば即ち
此世ぬと答へしとて 續近世畸人傳

岡野左内ハ上杉家の臣トシ陸奥ヲありて一萬石を領シ越後守トイふその武功ル甚ク多かりシガ此人又並ビなき福者トシ或時馬屋の仲間ト黄金一枚持テくる者あるを聞きテ呼出シ奇持トシ寝て更ニ黄金十枚を與フ貧クシテハ武功も金も去るを思フたるべシ左内暇ある時ハ金を數多並べ其工ニ卧すと樂ミテ其を聞ク人ハ武士の道にあるべクハ振舞ヲ言テぬハ無かりガ或時此樂ミを以テ居ける間ニ我ニ組の士の口論を仕出シテ

聞キケセむ敷キカキ金銀ハそのまゝト打置キ貞宗の太刀を帶ビ鹿毛なる馬ニ鞭打テ走りけき一日二夜の間さまじくあつたひなぐめて家は歸リシガ其間ハ金の事思出ルセぬ氣色ナリトを傳ヘ聞ク人ハ更ニ驚キたりと云續近世時人傳

或ハ僧江戸よりカヘタ木曾の山中ニありて驛馬ニ乘リその馬夫を孫兵衛トイふ道の惡キ所ニ至キテ馬夫馬の荷ニ肩をいせて親方あぶちしといひし助く度々の事ありと云

しき仕業をせむ僧よりなれどかくそらごと問
ふに己等親子四人此馬にたぐけられし露の命
を支ふせむ馬とい思ひしが親方と思ひしつて
るたりと答へてさて御僧もねがひありおあひ
なる清水の所より手洗ひ候を^もまゝ十念を授
けたまはれと請ふつと殊勝なる事なりと肯ふ
又其所に至りて僧を馬よりあらし己き手水を
つらひ馬より口をぐがせし其馬のふとがひの
下よりつとまりて共々十念を受くるさまなり
かくして大きき喜び又馬を乗せし次の驛に至る

その債銭とくくせをまづ其錢のつはごと
五文を取りて餅を買ひて馬を食せ遂に己が
家の前に至りける時馬の嘶きを聞きて馬夫の
妻迎へ出で取りあつ下馬を物食せ又僧を
見たり其妻子の振舞も馬夫もたふして心あ
り^んとたし凡そ慈悲の心の萬物も動らぬのなる
を殊^に又つらむべきは牛馬なり人を扶けて重き
を負ひ遠きをこり終日苦勞を畜類ハ物をこ
そ言て^心ぬ意いめへりてさそきくのなりさうを
牛つらひ馬かふもの、類情けめくあつふ

不多也如何なる心ぞ也此馬夫の如き有り
がき賤の男又ある續近世時人傳

高戸善七郎後孫兵衛といふ備中の鴨方村の
人なり頗る文字あり其父曾右衛門は事して極
めて孝なり父病は臥すと四年はあまた又晝夜
側を離せず弟源次郎も亦孝順みて兄と同く
懇ま心を盡しけり少く快き日はい近きあつた
又休息所を構へおきつる父を伴ひ行きて割
子の物開きとものこりの人々を集めて酒を勸
め心を慰めしむ善七郎公務の外他行せず抱

子の心を盡し行状正しくまづて人の及ぶま
たあつ多し早損水損ありとつて毛見せし
願てぞ田地破損し或ハ砂入りせり時自ら費
を出して修理し官邊の為めは煩る事願
出ては金銀を入は貸し與ふ時貧者あり利
足を輕くし他の物を借るよりも益ある也
實義を以て計り己が利をさあら言て窮せら
者に合力する事多く此蔭よりて貧家の富家
となれるも多し乞食など門又立寄りて物を乞
ふ時ハ分は過ぎて施れり終は領主の聞は

達し寛延三年二月膳^饗を賜てり二方金を賞與せ
らせありしごと

善七郎老後の事ちろふ或人の飼へる山雀の
翅を殺ぎ、そのを憐み乞得て養ひ翅の長ざるよ
及び籠を開きて去らしめ、とるよ去らず程
ちく翁京へのげら、とて家より一里許出で
て竹輿の内りて頓死しけきを家よ返して、
く事を計る間かの山雀をその家の東一町計お
る親族の許へ移し、その翁の死を也知りけ、
籠を破りて飛去りぬ、さて葬儀など畢りて後妻

子等翁が墓よ詣で、見以どかの鳥を、とあり
此墓所ハ翁が家より西りてかの移しある家よ
りハ五町許もあが、如何又知りて来りしよ
か、と人々怪しみて例の如く手を動かして試み
せ、て手よつかして舞ひ鳴きぬいと悲し、て連れ
かへら、と、と、又空よ飛去りぬと
ど續近世時人傳

若狭の三方郡早瀬浦の佐左衛門といく、が妻
又絲女といへる、がありけり孝心深くと善く
舅姑よ事ハ姑ハ先よ死し舅年八十よ餘り老耄

して非理なる事を言罵せども少くも逆の色な
く給仕す凡そ其心を承けて孝養する事に至ら
ざる所なり一年冬の日又舅鮮魚をもちて折ふ
し海荒れて漁り無けむを如何とせむと
たきけどもさふぬ状又もふふて門より出むとや
せむかろやせむと思ひつづらふ折忽ち足の下
に魚躍りつゝ絲女天を拜みて喜び乃ち調じて
進めつゝ隣の人の見しに鳶魚をうつらみ来て
絲女が家の棟より降りしやがて魚を落して
飛去りつゝこそ孝心の天は通せしむらむ

らの事をいふらむ其行状終に國の守に聞え
て米若干を賜り家の租を免されしとあり
續近世時人傳

若狭の大飯郡小堀村に與右衛門といふ農夫
あり常に慈悲深き者なり或る夕暮に二人の
女道者あり間立りてこれより西國巡礼する
者ありが行き暮れて道はわきまなくし
たきけよ一夜を明かす多歩くといふ與右衛
門哀しと思ひ心よくもてたしけり又一人の女
懐より男兒を出して便りたき申言りあるれど

旅て物憂きなごひなると女足の足のはか
つたす此小児よりびし折々の捨てもせむと思
へどさうが又犬狼の餌食も哀れむと云ひてそ
れもえせずあはせ此子を養ひし事ごとく心よく
巡禮し侍らむといふ與右衛門あはせを聞きて妻
みけりていふ我等年比子といふものなし此
子を養はば實の子を得るも同じあはせとあは
せ如何と妻も心うつく者も實の子
る事と侍りて連^速又承引せしれを巡禮の涙を
流して拜み喜び明の朝立出でぬすて夫婦を

子を宗四郎と名づけて天の與ふる所と大切
養育せしむるの後八年を歴してさらば實子
うけつりあはせを磯八と名づく兄弟睦まじく
成長して俱に農業をつとめ父母の事ふ
るおと孝順ふり後磯八の出で或人の許に奉
公す宗四郎といふく已むと巡禮の子とい
し素生も知られぬ者なり磯八の父御の血を分
けられし所なれど彼の家を譲りたまふといふ
父此田を弟に語せむ否もとい知る事吾が生
ぬさきよりの兄なり家を継ぎし事ふ事順たる

といふ宗四郎あつて肯てお巳む此家ありあつて
いつまでも此論絶えどされども跡を隠さむ父
母の奉養あるがごとくと思ひて遂に
隣村の豪家を頼りて奉公し給米を悉く父母
に送りて家には歸らずる間又與右衛門老病
にして空しくなるとも家を継ぐものなく村
長もてあつて兄弟相譲の旨を官に訴へけ
れを國の守感賞して宗四郎も米若干を賜ひ
て家を継がせ且税租を免し弟磯八も別
月俸を賜ひ帶刀を許して褒美せられとぞ
近

世崎人傳

山口庄右衛門大和の十市郡八條村の庄屋與
十郎の子なり父ハ寶曆の比凶作よりて同郡
八箇村の長と共訴へ出づる事ありてその趣
私あり又罪せられ皆伊豆の新島に流され
り庄右衛門七十餘の祖母を養ひて過しが
固より家財田地等も没収せられけむ唯力作
をもて辛き世を凌ぎり中よ父の心を感
めとして開文を贈る凡そ流人又文通するは
封を付け給して送るを法とせらるなりさて年を

歴て祖母身をかりしるで今ハ島の父乃許一行
きて事へ^むと志し領主ハ願出でけせども容易
き事ハもあふが力なく過^らる間大赦の事あ
り此事を聞^りとひと^れく弟の清右衛門をあげま
へ下して願出でけせども何の^ゆづ^りもなく其
年も暮せし明らる年遠江乃某といふ者西國順
禮して尋来り巴也も新島の流人なり^し去去年
大赦をあげて歸^りぬ彼の島もて與十郎ぬ^しと
ハ隔^りなく交^りぬ今ハ眼病もて盲となりた
まへりなご語り^しあ^らば庄右衛門^のい^ふ心な

らぞ思ひて高野山ハ伯父の僧のありける許
へ行きたるのびて彼の嶋ハ渡^りぬ^しと思ふ由を告
げ^り孝の心ハ實にさ^らぬあ^らぬ^しされど後
ハ若し赦^らぬ^し時の障りとち多^く命を
かけて願ひま^うす^るも免^れぬ^しあ^らぬ^しあ^らぬ^し
じと諫^めければ庄右衛門聞^きけて夫より又
領主ハ願出でけ^りに^至孝^の心ハ感^ずぬ^し官
廳ハ達せられ明らる春島ハ渡^りぬ^し免許を蒙
りし^るを妻をその親^にけ^り衣服調度を賣^り
て路費に充^つか^らず領主の屋敷を出^でぬ^し

る時まづ其貯ふる所を尋ねふれしはありの
まゝは谷へまゝうらむるよりまてい心もとなし
糧盡まばいりまて重ねて問たる持せし物種を
貯へ侍せむ土さへある所あつて二人が食物心
安く作王出し侍るべしと申すまておせを聞傳
へたる諸侯又て富豪の家々より奇特の孝子な
りとして餞別を若干贈ふる椀取水夫も官よりた
まはり伴船二艘を引らせ新島を渡る島着きて
見せむ僅に九尺四方計の柴の庵を父の實は盲
人とたりにてまゝつづかあり庄石衛門渡り

来りし由を語ぐまて初程の程たまあつて女は
委しく物語りに及びて且驚き且喜び夢なるを
覺めおれなど惑ひし大なることわりおれ庄
石衛門も悲し喜びあつて女まゝてむせび
けるその邊は福といふ老婆あり與十郎が盲人
とありしよりいふらつ扶持志朝夕心をつけて
いふまゝしを此庄石衛門が渡りしを聞きて
共よ喜ぶると大方おつか、る海島より珍ら
しき人柄なりき初庄石衛門は八抱の餘暇あり
持ら来りし物種を蔭か^むと見せか^せとど山野を

蔬菜を生せず纔又野老葛の根をよめほりて
食ふのみ冬ハ魚ル乏しくて芋をて命を支ふ唯
綿畑草の類を植ふ米に代ふて老いを慰む後
ハハ山のおなをたあ〜沃きおを見出して
米麦など作せりといふ島人もかく庄右衛門が
父ハ事ふるを見て父子孝慈の道をぞ知りける
とうや或時かの福女老父が外ハ出でうる間ハ
庄右衛門に向ひて君ハ妻子ハおはせと問ふよ
あ〜の由を語る情けあき人我此四五年が
程假初も言出しをまらぬあ〜といふは

事あり若ハ父此事を聞キ了るをせむお別事
よ心苦〜おぼさむとて隠〜るありと答ふ
此ひとつよて常の心もちい知らるすて流
罪赦免の事再應願出でらば嶋の長もその孝
心よ感じ官に聞えて赦らあへり江戸ハ至り
時庄右衛門が孝を賞嘆して金銀を贈る人もあ
り通行の路ハおぼせを見る者山をなせり〜と
也 續世崎人傳
永田佐吉ハ美濃の羽栗郡竹が鼻の人なり親ハ
事つて至孝にして又佛を信じ善く貧しきを憐

みふづて人と交るに信ありしは誰とあはれ佛
佐吉と呼びなふはい々々幼き時名古屋の紙屋
某が方は僕たりいふ暇ある時ハ砂をて手習ふ
小とを事し又四書を學ぶ傍輩の者あをを妬み
て讀書ニ事寄せて悪き所ニ遊ぶなど讒しけ
せむ主人も疑ひて竹の鼻へめくしぬさせど此
方は舊恩を忘せず路のついであはれを必きゆき
て舊主乃安否を問ふ年を歴て舊主の家大に衰
へけせむ又よりし物を贈せむといふ主の暇
を得たる後と綿の仲買といふ業をしるし料

をりたず買ふ時ハ買ふ人ニ任せ賣る時ハ賣る
人ニ任せ後は人ハ佐吉の直を知りて賣
る人ハ心して重く遣り買ふ人ハ輕く量りけせ
ば幾程なく豊は暮りなり父ハはけやく別は母
を養へり母餅をつきて賣りしき田をいふ佐吉
其心ニ違てを餅賣るあとを始めしは必きむ小く
志を多くと勸む母以ふりし其故を問へむ近き
ありに同じり餅賣る家あり大きくせば彼を
が障りはたらむといふ母も其意を得てちひさ
くしといへども外と同じく買ふ人ありたり或

年の暮に近國へかねあつゝ忽ち行きつゝわづらさ
に日暮きて路に迷ひし山賊出で、その金を
奪ちしとす佐吉いふ我を昔と負おれし今
は可成り金の興ふと傷むは足らずと投げ
興ふさしを其衣服をも脱きて興へよといふ
れも易き事なりとぬらむさあめて寒めらむ
ふは欲しとて我が家へ来て皆こゝ興へしとて
先づ着る物を快く脱ぎてきて此代りよ、街
道へ出づる道を教へよ我今日も道に迷ひたり
といふ一人乃山がらつゝと佐吉を見て我

せ教へしといづくへ歸る人かと問へば竹の鼻の
者なりと答ふとて佐吉ぬらむはかたや然
りといふとてあし人の物取たり我伴の者よ
言ひきかせて明日かへしとていふ否ぬ
あらに興へしとて又取らばきやうなりとて
行の道を聞きて別れぬとの明くる日山がら
言ひし如く取らる物皆持て来て還へしとて佐
吉さあしといひしとてぬらむはかたや走り去
りぬ凡そ佐吉が母の事あると晝して起居し心を
つけ夜に寐ぬとてつまる状を見ざれば已む枕よ

就めず常の所行敷へつくまへうらぬ中に或時
母柑子を望みしを近村より求むるもふし唯
同村に此樹ある家あるも其主甚だ吝者な
れどあれも乞ふもゆかざらと思ひかざらせ
むうらな之唯一ツ乞ひしと果して興へずさる
に其時思ひげを一陣の烈風吹き来りてぬの
柑子を数多吹き落しけむであるも今も惜む
心なく拾ひて興へけり佐吉が心天に通じける
ふと又思ふやう母身すうも海ひて後、百
味の珍膳も何らせ生前よりわらわらと

大人を招請する如く饗應せしとあつてひあ
りけりとも常の善事をなすも多し中細
なる事と道行と毎に布の袋を腰につぎ米穀の
落るるを手のとどくほど拾ひけり雪中の
饑鳥もほごころ大なる事と處々の土橋洪水
乃時に落つるものを恐れて自ら財を拾ひ石
橋とす凡そ至孝を初とし其善行至る所
を國の守聞召し米を多く賜ひて感賞
何事も望むるにあらずし出づる
佐吉老して覺翁又と實道と稱し八十九歳

にして寛政元年^子死せり 續近世畸人傳

僧元政ハ京都の人ナリ元和九年ニ生るニ歳の
時七月十六日の夜父携へて東山乃送火を見せ
しに大乃字を見て家ニ歸りてたゞちよその字
を志す又さあぐの玩物あそびものをなぐりて人其
名を呼ぶ時と呼ぶよ志すおひて取りあはと嘗て
たゞちよ六歳より始めて書を讀みむらよ
ひとたゞち授りれし事ハ忘るるふし或曰父
よ後ひて建仁寺大統院にあとび院主九巖長老
にふみゆ長老兒何の書を學ぶまなむといふと大學

をまなぶと答ふ長老即ち二行を口授せしにた
ゞちよ諳記して誦せり長老掌を撃て嘆どて曰
ふ誰か知らん今寧馨兒ありとはと八歳よりして近
江の彦根よ至り武事を學ぶよ亦善らむ十三歳
城主井伊直孝に仕へ石井俊平と稱す官乃暇に
常に書を讀み精力人よ過ぐ性山水を樂み風
景よ遇ひて終日吟咏を出家の志ありて二十
六歳よりして佛門よ入り後深草に隱遁の地を占
め瑞光寺と名づく内外乃二典よわたり凡そ身
目の觸るる所長く忘るる著書教十部あり父母

此舎を寺の傍より建てて孝養怠るべからず寛
文八年四十六歳に寂せり 續近世畸人傳

甲斐徳本ハ永田氏甲斐ニ居り伊豆武藏の間を
行きて其の薬籠を負ひて甲斐の徳本一服十六
銭と呼びて賣りてありて江戸にありける時大樹
病あり諸醫手を盡し、あどる志多しなりけ
り、誰が申しけ徳本を召して療せしめられ
しに不日よして平癒ありしれどもその賞とし
て、^いの物を下し賜りて今もその敢て受
けども例乃一服十六銭乃薬料をのみ申し下

したるを以て人々の清白なるを賞志ありさ
せむ官にもその心を知りて何より願ふ事あ
らむ申すべし由頼又命せざるは、吾友の内
に家無きを悲しむるあり、其れ又家を賜ふ
ば、方ほ吾も賜ふべし如くありと申し、は
どに即ち甲斐國山梨郡の地に金を添て賜て
てぬやうに其者を呼びて取らせしめ、身
薬を賣りて行方知らざるなりぬといふ、^終近世畸人
戸田齊宮旭山と號す大坂に住みて醫を業とせ
本草ニ委し、香川太仲の薬選を難くして非薬選

を著し印行す然れども其人の才を愛し
吾が子^をそれ^を門生とせし好し^をれ^を其^を惡
し^をを^を知り^をに^をく^をめ^をど^をも^を乃^をよ^をし^をを^を知^をり^をとい^をふ
べ^を一^を醫^を療^をと^をも^をり^をよ^をす^をとい^をふ^を病^を客^を十^を人^を
に^を限^をり^をて^を其^を外^をを^を療^をせ^をず^を故^を又^を貧^を窮^をと^を或^を日^を横^を堀^をの
ほ^をろ^をり^をす^をて^を磁^を器^をを^を買^をは^をす^をと^をて^を何^をら^を見^をせ^を立^を
寄^をり^を又^を内^をり^を包^を一^を人^を乃^を老^を婆^を出^をで^を戸^を田^をを^を見^をて
す^をめ^をと^を泣^をく^を驚^をか^をし^を何^を事^をぞ^をと^を問^をて^を婆^をの^を
ふ^を君^をと^を知^をと^を多^をよ^をて^をぬ^を事^をな^をれ^をを^を不^を思^を議^をり^をお^をぼ^をさ^を
^を吾^をさ^をき^をよ^を最^を愛^をの^を孫^をあり^をて^を病^を重^をあり^をと^をい^をは^を君

を^を迎^をへ^をと^を病^を人^を十^を人^を又^を限^をと^を今^をの^を關^をけ^を無^をし^をと^をて
お^をは^をし^をま^をは^をば^をり^を志^をす^をと^を孫^をの^を終^をに^を身^をを^をあり^をぬ^を時
節^をも^をて^をも^をあ^をる^をべ^をな^をむ^をと^を若^をし^を君^を乃^を手^をを^を經^をな^をば^を生
き^をゆ^を也^をし^をは^をば^をら^をん^をと^を思^をつ^をと^を君^をの^を顔^をを^を見^をる^をよ
つ^をけ^をて^をう^をら^をえ^をと^をて^を涙^をせ^をき^をあ^をへ^をず^を戸^を田^をを^をれ^をを
聞^をき^を甚^をぶ^を感^を慨^をと^をい^をふ^をと^を吾^を誤^をり^をと^を固^をより^を教
人^を又^を心^をを^を配^をり^をず^をと^を志^をとい^をふ^をと^を十^を人^をと^を教^をを^を限
せ^をら^をれ^を吾^を不^を誤^をり^をな^を是^を然^をれ^をと^をい^をふ^をと^を吾^を老^をい^をは^を今^をは^をら^をし^を
此^を限^をり^をを^を超^をえ^をを^を老^をて^を利^をを^を貪^をる^を心^を生^をず^をと^を言^をは^をせ^を
^を老^をの^を口^を惜^を志^を吾^をと^を志^をせ^をり^をて^を果^をす^をとい^をふ^をと^をい^をふ^をと^を後

よ幾程なく歿せしとぞ 近世畸人傳

美濃の芝原乃郷北方なる矢部氏の女正子初の
名を久子といふ年十六歳にして同國結むすぶの里の大
平氏又嫁して一女をまうと十九歳の時々の夫
法安の故をりて忘らば其女をつきて母の許
へ歸せり後再び嫁せず家を移して母兄と共に
京に住み歌と手香茶の風流をけしめ女
禮長刀の伎まを學ぶると多ありき此間假初は
故郷よりかたりたる時もと及夫後の妻も何と子
をいひてかたりと野中の清水忘せざりてあを

りし仲立りしとわく言ひなびけしと志文を
へ送りしをけなむと返きて一首の歌を添ふ
秋もあひて枯せしを今も何れぞ
ろす萩の上風その女乃為よ已せみゆる
の志ありしとば二十六歳といふは何某の國の
守れ姫君のめづりしとて江戸は仕ふ才
あらぬとよたぐひなく時をいひて過
がし傍輩の妬をうけて退き後又京に歸りしに
女と先は歿し母も失せしと悲みよ堪はず
あはるる身のかたきをふげし尼とたる時

二年二十八^八おとひのつとをさう如くのふらふ年
遂に病みて終はり才けら女乃薄命いと哀せな
り近世畸人傳

近江の堅田の浦乃豪農北村氏祐庵と號す茶事
に熟し且物の味を知る事古への符朗易牙に
恥ぢぞ傳ふる所の話多^し常^に又奴僕をして湖
中の水を汲ましめて茶の水又用^ふる^る某の所
と令すその指す所を何れも汲み来せむ必
下其所を知る^ると神の如^く終^に又欺^るらんとを得
ぞ魚鳥の得る所を知る^る此の如し然のふ

たがは或人田樂豆腐を食^てし^ら此串の竹
は遠く来せらる^るのなりといふ主も知らず厨下
に問ひしに果して浪華より物を荷ひ来せらる竹
を^し削り^てする^ると湖中の鯉鮒の類
を調^へる^る魚板敷板を用^ひ初め鱗をは^らつ^て
り肉を切るに至^るる^る次を追ひて板を轉をか
きせがせむ^る香^りてあ^まく^くとい^ふ
り一日京師より茶事の友^と逢^ひくる^る名に
負ふ源五郎鮒食^てせ^らるとい^ふはさ^らむ^る鮒
日^と契^りて歸^る其日友人の至^る時其門鮒敷

十を取入るを見り食に就きて出たる所
僅りして腹は満ちて友人怪しみしに
取入せしよしと見しに是を以うよと言て主
笑ひて望みしよし所の源五郎鮎の真なるかの
ハ数十の内より一二を得がぬしといへば
凡そ其味を知る異能他に比さざる奇と
いふべし享保の中比まをけりし人なりと云也
近世畸人傳

佛行坊僧都敬已と叡山の僧あり坂本は隱居
ひるす念佛の一行は歸をれど風月の情は海

新

を或年の弥生は山僧多くお連せてその庵を訪
ふは櫻盛なるを皆めをけしを此花のさうら
ぬ内は再び来あふと約をさるありて他日
又きそひけりて行きさるまひぬりて唯茶を出
だせるばうきして何のそなふ長き日
は暮せしうきしを今日ハ花見うらて招き多
きふあふよたぐまは何ぞしと思ひし違ひあ
りあとなありと言ひしに佛行坊顔をあらわ
てさうら苦しき山法師うな我が若うし時
まがれんさうたかめしぞよかゝる花を見あが

尚心の飽きあふむ飲食を求むるやう也何んか
く足る事を知らぬ心をして山王也大師の眞加
んをたけりしといふめはうむ各花の興
んはあつてまじくしと歸りしとふ近世時
人傳
太田見良字と資齋大洲の加藤侯の士あり學を
好む醫をもなびて京都に遊ぶ或時豪商某が僕
を療せむ時衆醫並び座坐を適との家乃主人持の
席を過ぎあし衆醫皆拜伏をせど主人はて答
禮せず見良大に恥ぢて再びその家に至らず病
客常に門は満りて醫療を乞ふ其清白なる一事

ハ藥物は於て極品を選びて價を問ふとある其
言に曰く若し時の價を知せばおのづから鄙吝
の意を生ず調劑の間其價の貴きもの減ざる
に至る吾ふ何さゆきを思ふ故に謹みて問
ふぞといりしと近世時人傳

乞食の老婆は京の三條室町にて絹の袂紗又
包みある物を拾ひて其傍なる商家に立寄りて
尋來る人何れぞきを返あしたりしをいふ商
家事の繁き由を言ひて肯て買ひしを情けな
き人やおぼせる人乃憂を思ひたまふと誠あし

に恥ぢてあぶかりき又其名を問ひては宇谷
乃亀と答へたりはてまばしりて物をあぶぬ
る状なる者を見付けて問ひたゞしつかの物を
返志興へし其人大に喜びておれぬ報ひは米
錢など持来りかの老婆より来るものかを贈呈
たまふと托すその後老婆より来りておれぬ
とある人の知るか多かり也と問ふ商家ある
の田を告げてかの報ひの物を興へしに老婆笑
ひておれぬを受くるはほどあふむもの物を賣て錢
を得侍りしとつひて物持とぬ袂と輕く夕涼

とくらむはひて去りしやど 近世畸人傳

山城の山科の傍に田業をなさる父子ありけり路
行く人乃金入はしる袋を遺しけりを其子高き
岡よかきあがり呼びしめへきんとす何事かと
問へばおれぬ有りて答ふおれぬと拾ふ世
法たふしある由ゆき事またおれぬとて我は
田業をな捨てておれぬひけしとふん固りか此
せる人の憂をはりて呼びしめへしんとす
と惻隱の心ありて惡しきにたりかねど世乃
故なき他人乃事よかつらひて己の業をうら

たげかく者よと善きふきし近世時人傳 僧契沖ハ尼ガ崎の青山族の臣下川善兵衛元全
が子なり歳五歳のを母間口氏口づり百又
一首を授けしに不日善く覺之父も實語教を
教へし亦同じ父母驚きあやしみ十一歳に
あして其近き今里の妙法寺手定密師の弟子とな
る手定初め般若心經を授く讀むと四五遍して
持らし唱へ且書す長^あく其法を練行清苦にし
て其名時乃為名々稱せらる又遍く皇朝の實録
古記を讀み専ら和歌を好みて博く其書を採ら

延寶八年師手定寂し遺命して妙法寺に住持せ
しむ契沖別々一室を寺に傍り構へて老母を孝
養す水戸の義公萬葉集の注を契沖に命ぜらる
^あし召し、うご小固く辞してわがむ然し
ども公の古義を好ましく喜び遂に萬葉代匠
記二十卷惣釋二卷を作してわがむ義公其注
乃卓見多きをうらむ且思ふ所と合ひしを奇
とあして白金千兩絹三十匹を賜ひてわがむをねぎ
ら^は契沖即ち寺院の修造を充て且貧乏の者を
賑へし一も自ら貯へず著作甚ぶ多く元祿十

四年正月六十二日して寂せり 近世時人傳

三宅重固尚齋と號す山崎闇齋の門人なり人と
なり剛毅にして經學を任とす阿部彦子仕へ君
を諫えて禁錮せらる其妻も亦婦徳を以て
尚齋の禁錮せらる時母と二子とを妻に托し
て金二十片を與へ母の奉養懇々勤むべき由を
命す後三年を歴て尚齋赦さず家族相見て安全
を喜ぶ時妻かの金を出して夫に返す尚齋大に
怒てあり何事ぞ此の如くなり母君の窮しめ
すひし事如何ばうとある汝不孝の罪いふべ

かざると罵る妻あづうと答へて母君の奉養の
心乃及ぶ限り盡しとぐりぬ但し我の身一人の
雇ふれとありて為ざる所あり其價をかりし事へ
奉るはなは此金のいく救ふせあるは時の用
に返しまわらせんとて貯へておぬとわしれん
たはなひしては苦しうかえあるはに
そが妻子の身として安んずべきは何ははと
思ひて吾等三人も冬も綿の衣を身につけ夏
も蚊屋をたせはかき母御のめん多思ふ之
し事なりきと語らるを尚齋も大に感す

て深くその勞を謝す。 近世時人傳

若州小濱の府下に病狼あり。 其
士の小婢十四五歳あり。 綱といふ。 主の幼
児を負ひてそのわらわを遊び。 時々狼不
意に走り來りて飛びつきけり。 綱は急を已む。 裾
をきりて背の子をおほひ。 狼はにたどる
る時狼も綱が尻を喰ひつ。 ぬきたる間。 又聞
き。 乃て集りて。 しかを狼に即ち走り去りて。 ぎ
て綱を物に載せし。 尚言葉た。 ぬきたる主
は子乃故無き由を告げ。 路にて息絶えり。

やうしてその親の許へ昇き入る。 主の妻も
聞きて馳せ來り。 綱が母幼児をきりて血
にまみせたり。 どのつゆばうをけり。 せ
させ奉らざるしを悦び。 此母を
たゞそのまはけざる。 此事を國の守關
召して。 二たぐ哀れむ。 大なる碑を立て
忠烈綱女墓と名らし。 儒臣小野忠次郎と命じ
銘を書かせられ。 三日大佛事を行はれ。 遠近の人
も詣りて詩歌の作る。 手向けぬと聞
之。 近世時人傳

水戸藩乃奉行職岡與石衛門綱治の妻宵子の同藩長山七平の女たる夫婦のほけは睦く奴婢をぬくもみてよく恵めりて内を治むる婦徳うるも中々綱治の子善助綱常と家婢の生るる所あるを宵子やがて已ぶ予也其婢を深く以てたり漆村の某と嫁せしめ綱常を愛育するも我が生めるが如くなり母子乃間いさるる隔つるも綱常も亦孝行二心なく固より彼の家婢の生るるもいふあはと十四五歳まで知れずしてけりき綱常が以て事なりし

時病を患へたりしは宵子醫藥を嘗め試み又人目をほくみて夜は紛れ神崎寺の觀世音へ素足ありて詣で祈りかゝてその病も癒えたり凡そ婦人の生付き妬乃甚しきものなり若し妬あはるる百拙掩ふべしといひ宵子の如きは妬のなきのみならず世法中の養母継母の戒とむなり例し少なき婦徳ありかし近世時人傳
甲斐の山梨郡の農某の妻名を栗といひ舅姑も孝行してその名顯るる然るに舅姑も夫も失せける後いとせ山抜けして山崩せ大水出で村

里をぶらぶらする時粟も溺れて死せり後又
その屍を掘出して見ると二十歳なる養子を
脊に負ひ八歳ありける實子の手を引たりと
けり幼き方をくも背に負ふべし長けしる
を負へるに此時又臨み逃むとあまふるも
養子を重くする義を思ひしふるべし女といひ
邊鄙の産といひ何の學ぶ所の何る事ぞか又天
性の美なるかと此の如きハ世は有りがらぬ
欠くあるべしさらに思はざる災はわたり死を
くせむとして悲し然らばあまふ此災はらむとて

其徳すすり著るるといふべきは國人の世に
たゆみ碑を立て事實を記せりた 近世時人
筑前福岡藩の教授貝原篤信其學博く和漢も亘
て性甚だ謙くして名も近づくあまを喜ぶ一
年歸國の海路ありて同船数輩各姓名を問ひ聞
ふも及ばず何となき物語としかし一日を重ね
て其中一人乃若き男人と對して經書を講
ず篤信例の恭く黙くしてあまを聴き一言是非
を論ず船着岸して各始めて其郷里をあか
し再會を契りて別り、又臨み篤信は吾れ貝原久

部

兵衛と申そらぬなりと名乗りを聞て彼の若き
男大かゝ恥ぢかされて速に逃げ去りしと云ふ
世の人とあり乃一端を見らばし世時人傳
井伊掃部頭直孝ハ侍従直政ガ二男あり此人脊
高くて骨太之身の毛すかき生ひ出で恐
ろいなる男あり鬼掃部頭といひあり幼き
を父直政上野の箕輪に居て其所の庄屋ニ此
子よく育てよとて給てなり十一といふ年の五
月ハ彼の庄屋ガ家ニ夜盗あり入來り直孝其
一人ハ高股を切て下部寺召して生捕りぬ十二

歳の時直政竊又直孝召して年來取し所の采
配を授けぬいふ思ふ所也いふん其明年ハ
直政ハ卒してけし年十六にして將軍家に召仕
たり慶長十九年冬大坂の兵起りしハ兄の直勝
病々臥す大御所の仰を承り直孝兄の代官と
て軍勢を率かて城を攻む此年東西和睦の後
將軍直孝を召して兄ハ代りて父ガ家継か
らむ此時直孝涙を流して兄を候ふ直勝年來
病々侵さば軍國の務に堪はず然りとて申せど
大御所昔し父を候ふ侍従をつけさせり

ひい旧き者共尚多し候つて家の事をば沙汰し
申さるし又直孝ありて候ふ上て天下の御事は
むらん兄が代官として彼の手乃者引具し馳
せ向ひ候ふ**む**此度の如くまゝを候ふべし
以らたれど仰ふりては兄ありて候ふ者を退けて
父の家を継が**む**と望む所ありて候ふ者として辞を
たれども免はせざるを重なりて安藤帯刀直次は
つきて頻々歎きけせども終に免させず斯くて
直孝父の家継いで後出仕に進み出で、本多佐
渡守正信が座の上よりつゝ其體誠に優なり事終

アて後御前を罷立らして正信は對ひ今日の振舞
無禮なりと侍せざるなり故侍従が家をつぐ
べしとの仰をありて候ふ上は向後の事と
御免られといふ正信は今日御振舞正信
らを悦び侍せ斯く何ぞ**む**人と云はれぬ
將軍家乃御心の程はがごとく候ふ所の哉とぞ
答へたる是を見し人お寄りてきのふより大
番頭してけるか乃末座に伺候せし人今日一
藪の上より立ちしりはよの優長も見えぬ
これより將軍の御固めなりと賀志申して

越前中納言秀康が三男出羽守直政の幼名を國
松丸といふ母の家の女房なり國松丸十四歳の
時大坂の軍起る母國松殿を近つけりわがせて
殿とましき故中納言殿の御子大御所の御孫
ましてわがせてたまふ耕檀と二葉よりかきげし
とつて承せり矢取の家を生き既又十歳よりま
らせたまふ今度ゆい形り功名をいふ事とて
御所の御感より何つうとせしむる相構へしきり
たびれ人より指なきれしむしを御父と

さる大将なれどいかにきりぬ腹もわがせ
たよひし故より不覺にこれなりと言ふは
事お口惜しむる御事候ふを自ら
いふ女たりしとせしる功名をもせきせぬ
はぬれど傳へ聞き侍を生きと再び逢ひし
るをべしと覺えんと涙と共にあきとて
軍の装束どいかにいふとあるぬ出し
しせりさしむる大坂の軍越前の軍勢加賀
法兵と先を争て真田が城を攻めし時國松真先
を死す天下又名をばらげたりと後又出雲隠

岐の主となる 藩翰譜

越前中納言秀康ハ東照公の次子なり年十一
て豊臣關白が養子となり十四歳關白と共に筑
紫に渡り一方の大將めて日向國を平と十六歳
時伏見の馬場より出で馬に乗り關白の
厩に預り秀康と争ひて馬を馳せ頗る無礼及
び馳せ馳せらるるに關白の刀を抜て首を中
お落す爰より關白の家人等狼藉出来ぬ
といひぬ秀康馬驅けをせしめと瞰すやあ
いふ殿下の御家人より秀康と争ふ

て馬を馳せ且無禮をすづきやうやう悪
う振舞てしやうし秀康うらむたと言ひけし
を恐せて迎づくそのなり關白此由を聞き秀吉
が子に向て無禮せしやう其罪死すといはれり
つげ也秀康ハ心剛なるのみならず早業も人
をうらむたやう却て秀吉の感もあらざり也

藩翰譜

青蓮院門主仰られて曰く尊圓法親王の手蹟を
普通の琢磨する人の目も立らざりし然れ
ども此筆意をわする者ハ他流又至りが多し

此筆を善く学ぶ時、衆流自ら至極せむといふ
たもあらず凡そ文字の亡命の後、た^まの^まの^まの^まの^ま
正しく書きあるべし然るべし縦ひ名墨たりと
いふとも死後又讀み難き文字と悪筆と劣筆と
其上古来より筆を嗜めといふ本文を見ず唯勉
勉學んで書を讀めといふ見えぬれ此事皆人知
る事ふせむ時又取りてわきまをぬ者けり故
に爾云ふ又世尊寺の行能經朝より以後の筆法
と皆適はむはふがなつらんひつらん體を見んて
いざせ收しはり形が正しく見ゆる文字を皆

善き手跡といふべしあかざら其人乃流義とい
因るべうらば中頃より生才覺の禪僧如き者或
は和朝の風ハ拙し或ハ全き文字を卑しあざ
まざ一人をさふして已むが手跡ハ嘗て心得ず
文字の分ちの見えぬを本として自負するけり
さしつとあさき事どもあり此頃禪僧や
の者折々尋ね来ると筆下又立多^む事をほづ
者もけりつせむ予あつて此者は與せず立歸り
ていよいよ我家をさみんべしちどあまの
よ申されけりとなり 塵塚物語

大人小人よぶらば一旦の怒りよて親子の差別
 しかく朋友の信も亦唯心氣のみささみばり
 て主君の命を忘せ人の諫をも聞入せばる事
 高貴卑賤を分らず世間皆同一あり唯其人の高
 ちし卑しちよと因りて或は身を顧みて其怒を
 面よりつす胸の程又籠りて暫く時を移せむ
 乃ち怒も止みて事無きものたりさせど是は大
 かり高き人の振舞なり也見えしより又童僕下賤
 の輩に至て愚らふれむ其事又怵へざらんして
 怒を其面よりつして果ていあさほらなるを

も顧みず仁義といふ事も知らねどもて禮法
 なるゆきすす唯一遍の我意のみして心のま
 らよ口外へ出すその忍ぶと忍むざるとい大方
 尊卑は因らと見えしより 塵塚物語
 山名宗全往り大亂のあらはの或は大臣家よ
 ちわらて當代乱世まで諸人あらは苦むあどさ
 まが物語しとあてら折節亭の大臣古き例
 を引きてさきかこ言はれらる宗全
 猛らゆめめる者なきを臆しつる気色もあく言
 ひける君のおほせ事一往に聞え侍らどあ

がらせれよ乗じて例を引うせらる事然るべ
らむ凡そ例といふ字をむ向後し時といふ文
字よ變つて御心得ありしとこれ一切の事て昔
の例よ任せて何々を張行はるといふ事此宗全
も少々の知る所あり雲の上の御沙汰も伏して
考ふるも勿論ありし夫を和國神代より天位
相續きうる所の貴きを言て建武元弘ら當
代まで皆法を正し改むべき事なり乍憚君公
若し禮節を勤めらるし又古へ大極殿のそつ
りて何の法禮けりといふ例を用ひて後代其殿

亡びしるよ至りて是非あり又別殿にて行て
らづき事あり又其別殿も時けりて若し後代亡
失せむ徒らなるべき凡そ例といふも其時が
例あり大法易てかばる政道て例を引きて宜し
からづし其外の事いかにかきも例を引うら
事心得ず一概又例となづみし時を知らぬら
故又或を衰微して家門とばし或は官位のみ
竟望して其智節を言て亦此の如くして終よ武
家よ恥かからせし天下奪られ媚をなき若し
強りて古来の例の文字を今沙汰せむ宗全如き

此匹夫君又對して此の如く同輩の談を述べ侍
グやふれとて古來ソグもの代の例が如是
此則ら時なるべし其我今言ふ所恐も多しとい
つども又志が—あがを後世に我より増悪の者
も無きもはつとて其時の體又因らば其
者も過分の媚をかりてつとてつとてし今を
り後ハつめつとてつとてつとてつとてし今を
方の例をみたふつとてつとてつとてつとてし今を
て身不肖ありとつとてつとてつとてつとてし今を
以て尊主君公皆扶持し奉りしと苦々しと言

ひけつを彼の大臣も閉口して初と興ありし
る物語も皆徒らとなりけつとてつとてつとてし今を
是は非の塵塚物語

楠正成春日の社に詣て東大寺の内残らを見
まはりけるに鐘楼下より人多く集り居て此鐘
て日本第一の大鐘なり三十人計して押しなら
むよみしつとて動之事つとてつとてつとてし今を
又傍より一人進み出で仰の如く三十人計の
力あつてつとてつとてつとてつとてつとてし今を
夫を以て一人して一日の中を動つとてつとてつとてし今を

とつゝるを授けよ並人居る者大寺よ何ぞし
き笑ひしてつゝも斯様のかゝるがまある事をの
たよりど終る其手許を未だ見申さざると言つて
彼乃一人かきねて言ひなると仰尤の事なれど
遂は御所望もあき大事を輕くしな多かり
つゝをか顯しなべし誠は不思議と思ひたまへ
と明日もあせし連せ立ち侍りて已せが申
す如くして此鐘動きたらば我が所望のたか
ふをあらうと賜もるべし又若し動かし得ざる
御望も随ひてつゝやうの物も奉らんとのを

と息巻きて後と互は言葉荒らふて會議の決
せざれを正成も久しく居る由あり一人工夫
して動かしなつゝ所至極うり大方悟り侍り
のみど思慮もあき譽めて歸りけり召仕ふ者
以と心得をあら宿所は歸りて初悟らたま
ふ御振舞もつゝやうの御事又侍る承りたく
思ひ奉ると言ひけしを正成の言へりて以と易
き事なりかきねて参るべし試みし見せしと
言ひて四五日過ぎも宿は彼のやうのと召連
れて東大寺の鐘楼の下に至りて僕の中一人力

強き者を擇り出し高さ二尺許の箱を取寄せ鐘
は下より置きて彼の工場のぼりて汝此鐘を押さ
ざし強き押しをづらばつる同ド頃押しして
て休み押しして休みをば其程を違へば手乃
平を鐘に付けてえいと言ひて押しえいと言
ひて押しすべし必も動うがごと退屈せむつら
も甲乙あく押しすべしと言ひ教へて己の刻許を
押し出して申の刻許を怠る事無かりけり
されど鐘も動く事無かりし正成今少の程
押し下知しける龍頭のほどをきくべ

鳴りけむをさむらとと思ふ中少づぐ動く
き出でいゆらと志をせむやふと肝を
消えさむ奥深き御計らひなして感涙を
流さむりやぞあせ正成の例乃深き慮りなりさ
れど速に動かすも三十人計の力も
及びざる鐘一人の力を以て功を積めを動く事
三十人より多しなり是を懈怠なく篤實と起
りて知るなり斯様の事傳へ聞けるに其實否に
知らねども関東勢の大軍を僅の手此者まで何
ひあふひけるに深き慮りなり下し 塵塚物語

亦人ありと智を言まじ汝等ありと結句我より超ゆ
べども如何しといふに常に下民卑賤のわがを
見て人情を細く目に觸るるに因て物の思遣り
下臣の身はど委しあぐべし此の如く一等こ
法序次人間はど品ありらのをあざし書を見て
も目も觸れを哀れを目近く聞かざれば思量
所の情けを少くし折々主従を引替へて
世を治えたらんことを善かたづき物と戯れら
るゝ近習の人々嘗て此返答を言ふ者無し稍有り
て遙く未座又脱^脱もつら森元権之助信光といふ

者進出を以て勿體なき御意ありしを侍せし上あ
りしの下を以て候へ初主君乃よりと申
す唯おほやうならん物とさけらざると善く
いふて候ふ凡そ大君の御利敷下後の如
くならん悪く結句下とて萬づの法を計ら
ひ難くなまじ御利根をぶらむれむ民の為と
却て煩ひよ成り候ふし如何と申すこと
も三皇五帝の聖代の如き今時におぼしき
ゆじ又秦時時頼の如くに人を撫育^{撫育}して飽足ら
ず尚頭人評定の者賄ふあけりて民をなやませ

事もあそあんがれと諸國を斗敷し下農商旅
はたぐちかぬを憐み天下齊しく平又治えられ
志事古今又例しなき事申合つりそ好より後
將軍家又管領奉行頭人評定の心を見侍りに
多くて皆私りり人を害するを省み此謂也
して兵乱打續き候ふ惣じて人界の品を工夫仕
りし譬へも五重の塔は比して申さる國主も九
輪の上は寶形なり夫々是下の重々皆御一族純
類又其下乃重々大名高家よりより一重づつ下
て皆をれど一の役人領知相應り位も劣り威も

輕志初下の土臺の如きも中間小人恩澤もはら
かも渡世をららぬのどなり是等皆御扶助
はらがる人またたぐへ初塔の具を離せも其外の
草叢の露も命をららぬ蟲の如きもはら皆農工
商の輩なり是も天露をたも潤雨乃恵みなりを
は生か難し此事恐もあがも能く御案じ候ひて
向來憐みをたもさるやも思召さるべ
く候ふも申さるは氏満大きに悦喜しりて唯
今の譬へ時又取りて面白し能くも申ししるも
て酒たぐもさせて大祿を下させたりとあん其

時ハ侍從傍輩ハ大汗ありて無用の譬へと思
ひし大祿の後ハ天晴しし手柄あり森元な
かむも譽めぬ人ハ無かきしと塵塚物語

関山惠玄禪師ハ智行兼備の道人本朝ハ並びな
き禪哲なりしつくり妙心寺ニ住せ志願天龍寺
夢想國師嵯峨より入京の折節寺前を過ぎける
間又を關山を訪てせけるハ折よく関山住
坊よりけりてやがて破せ衣をさすの走り出で
先づ御入寺せしめたまふとて引導して住坊に
入と快く對談けりて後國師ハ郷をぞつづき

が貧賤なれを心外なりとて破せしる硯箱より
錢四五錢を取出して近隣の在家ハ小僧をけし
て焼餅といふものを買はし夢想へもてあし
けりしが夢想もあれを見ていふやきながる関
山乃志の切ふるを感じ入て賞食けりて快く謝
して退出しけりとなし輕忽のもてありたとい
ふハ愚なるとしつくりかの夢窓國師ハ四海の智
識ありて當時天下の大入渴仰の上世舉て崇敬を
た言舌は述べざりしかる止事あり高德を
関山のもてありつくりけり飾らずし唯その

腦まれば公事雜務歌道等を詳し記して一
日も怠らぬ人ふと彼の卿日記の中より今日の
疾氣は迫り艱ふ今日は何々の病よりして苦む
あじ一世の中快き日になし然せども篤實を以
て百世の名を遺さるゝものなり根機といふは
病と又別の品ありと見えたり志すのみあらず
貫之ハ一首の歌を二十日中を工夫怠らず藤原
長能ハ公任卿に歌を難せられ死し宮内卿ハ
歌を深々案じ入るて血を吐きあゆみとつて
り又宗祇ハ連歌を執して句を案じ入て朋友の

机前より訪ひ来りを知らず此外名人の道は執し
たる事数つがごとく漢家の潘安仁といふ人の詩
を沈思して既ハ白髮の翁となせりとつて人
は堪能くして實あらはのハ少く不堪なり
らる道は執篤をれを終り其極に至る譬へば我
ハ物忘れりして文を見せざるは覺えず我ハ籠耳
を以て用いたる下と人毎に言ふれども
皆好らざるよと包てたり縦ひ籠りて水を汲む
程の健急者なりとの其籠を平生水は沈むれを
其中ハ水自然と満りて學問も平生不退にして

眼まなこを書きまじりて久しうして終に其味ひを知
りし言ひけし此事は徒人も知せる事ながら時
又取りての譬へをかしく何多かりとかく大功
の遅く成就をまじりて事や忘るべからずとぞ
塚塵

物語

昔乃武士の書ける文は少くか的事も也さ
しく文言あらうと義理をたかして書きしと見
ゆ今の世の文は然らず多しわをけくの振舞
のやうに覺ゆひとくせ自ら竊は東國へ趣き箱
根権現又詣むる未由なたづねし又曾我五郎時

刑

致が在世に當社の道邊失火は及びける折柄と
がらひ越えたる文としてけりその文は曰く

夜前之隣火忽消訖貴寺安全之悦千萬々々委
曲期面謁而已

此事はあり一紙は書て名乗を書けり外の言葉
を雑へざらば尤然とづきふらまひたり覺ゆ
塚塵

物語

東福寺の虎関禪師の門弟の中に少く器用なる
僧一人けりて此人後には碩學の譽せり何多べ
し人皆言ひあり或時學窓の中より道家乃

刑

書の程をわんごろ見えてあれなごむいと思ふ
氣邊見とけを虎関際スキヤより見て呼びよせし
曰く凡そ大きある學問をなす志志行ふを必す
何もの道ままほれ注解ニ泥ららせし又時を
移すべからずかせあれは時移りゆるし又終
に老年ニ及ぶ先づ初心の者注に目を暮らすハハ
して五經三史孔孟の經傳を讀みて大やう其理
を巧みらめらるる於ていそれより博と何もも
も益ある文を見らばしままの文の中ニ深
き意味ありて師傳を受けざりて自ら解しハハ

うき所あるを其處りりかゞふべし大かぬの事
は知れりしき所ハ捨ておきて先へ行けど其理
終ニまげぬべし必すあるもの詩文の端の
少しきを味ひてそれ時刻を移せば大なる道
成りらし大功の細瑾を顧みむといふ諺を忘
らばらば此文の中ニ乃そつしまの解志がぬ
き所より彼の詩文は何もの言葉ハ覺束なしと
て目を暮すつらら本文を多く見せむ自ら知ら
るべき事なり初より一枚二枚の文もても残ら
ず見解せんとする事成りがららるる功を積

めど自らあらわし分明なりと言ひたりとあり
ひんく名を顕も人々格別の意味はる事とぞ
物語 塵塚

利

足利將軍義植ハ心正直なりてやさしき生付き
よかてハ武臣家僕の輩と言ふ及ぶ公家
の人々ハ心をもばりて不便せしむらるされ
ど乱世おれを將軍の名のみをよめ下ざり
の輩計らひて上意と號志我まを振舞ふ間ハ
せよ因りて科無くして人の口よかくらせらる
事ハけりき此故ハ武臣の罪を將軍ハ恨みて

いよハ騷動ハ鎮りがさしと見えたり或時大
納言某を召して閑所ハ於て談笑けり次でよ
言てけりて凡そ大人ハゆるづ心ハ適ひて四
海の主ハけり多々の人民日々ハ以たまハ事
を訴へ来ころに其事耳ハ入て不便なきとすの
けたりかなむあなづら身ハ染みくる哀みハ
無ハ畢竟我も苦みハ遭てざる者て人の哀みを
知らざるあり我もひんくせ政元ハ事に苦める
より下民のいんくを思ひなぞらく侍ハふ
れ死を恐るハけりけり近久方人の無き折節

心細きものなり鰥寡孤獨の者平生力無く思
し事推しけりしと慈悲乃心無き者の生ける
甲斐なし況や天下を知らぬものを第一不便
を先とすづきものなりつらき古今を考ふる
に泰時時頼ハ徒人より下我ハ朝法武賢と言
ふハ彼等ハ振舞ひたりし我ハ壯年より常に
下僕を撫で匹夫を憐む心のみあせど我身とく
心ハ任せぬ世ふれど事行ふて打過ぎ侍り今暫
し世の状をうめむひて我志を遂げず思ふ事
侍り月日ハ逝きぬ年漸く傾きゆけば終り其

思慮を空しく志て憤りを泉下ニ留むべしと思
ふ人々も當時衰朽の身なきと自らを察し
心をほきらじらむ一日も生けり内は身
ハ應じて人を扶助したまふべしと志めや
雑談ありけしむ彼の亜相もつらき聞きて狩
衣の袖を志ぼられぬ返答も無きと
か如誠に大樹の身なり斯る心なせし
が事侍り塵塚物語
藤堂高虎家臣を待たず太閤の流布り暇を
請ふ者何せば明朝茶を申してその座を

佩刀を與へゆらまを思はるかふをすめ我が
許に来せ申通せんとして少しも留めざりたりとひ
きたび他は仕へて来仕ふれを本地を與ふ
かゝぬ者多かりしとぞ 老人雜話

上泉伴勢守は上野の人として劍術の名人新陰流
法祖より上泉諸國を遊歴し兵法を修行す或所
の里人民家を圍んで騷ぎあへる所へ行きかゝ
るその故を問へて罪人ありわらんべを捕つて
質とす人々あれを圍めども以らんべを捕つて
や能くす童子の父母悲むといふ上泉聞て曰く

我その童子を取らんべとして路を過ぐ僧を呼
びて曰く罪人有り童子を捕へて質とす今我れ
謀りてあせを取らんべし我が髪をとりて法衣を
借せといふ僧諾して髪を捨てて法衣をぬぎて
上泉は興ふ上泉乃ち着て拳飯を懐みしてその
家に入る罪人あれを見て曰く必ず我は近づく
べらんべと上泉曰くその質とて捕へらん童
子飢ふ及ぶべし故にきり食を持来せり君暫し
ゆめめと興へらん僧多幸なり夫は僧の慈
悲をみて行ひとす見聞するも忍びざると懐中

より拳飯を出して投げ與へし、拳飯を出して
曰く君も飢ゑたまひなむ、おきをか食ひて勞せを
かきかたしへ君必ず我を疑ふらむとちかきとて
又投げ與ふ罪人を伸べて取らむとてその所を
飛掛てその手を取て引倒れ、童子を奪て出
づ里人終り罪人を殺せり、上泉法衣をぬぎて僧
と返へす僧甚だ嘆じて曰く君は誠な豪傑なり
我も僧とせむ、此の勇剛な感ず實に劔刃上の
一句を悟り人なりとて化羅を上泉に授けて去
り、上泉常々此化羅を秘藏して身を離さざり

が後高足の弟子神後伊豆守と興へり

武藝小傳

蒲生氏郷は近江乃士とて佐々木承禎の臣あり
き後織田信長に事へ又豊太閤の事ふ氏郷勝
せり者として初の伊勢の松坂とて十二萬石を
領し、夫より直に奥州會津百二十萬石を領す太
閤の時、是事とて時又四十歳ばかりなり、承禎は
近江を領して大名なり、若し信長は滅する、其の
子の四郎とて太閤の時又咄の者、成て知行二
百石なり、氏郷その臣あり、其に百萬餘石を領す

さるに伏見方どして太閤の前は侍し退散の時
氏郷昔を思ひ四郎が刀を持って従ひ事なり
とぞ老人雑話

毛利元就が長男は隆元次は吉川元春次は小早
川隆景なり隆景元就の三男とて十二三の時
より父は侍し一生乃間子は卧し寅は起るとい
ふが如く不断夜半過ぎまで伺候し曉天に起き
燈火より朝膳より終日父の側よりして諸方
へ用を調へると云元就隆元死して後隆元
の嫡子輝元を一入尊敬し元春と談合して輝元

を取立ると次第偏は周公且の道を學べり常は
輝元の居間の前を過ぐる時と必ず膝を折て手
をつきてゆく輝元が座よりけりぬ時とて亦然
りおのひろくをりて平生を推しけり
老翁

物語史
籍集覽

惺窩淺野紀伊守の方として孟子の一段を講談す
生於憂患而死於安樂といふ段あり講談畢り
後に紀伊守言へり我も石田治部と中悪し治
部存生の間を勵んで人よ非を入らば身は
堅固なりき今治部死してその上御所様の御ね

んぶる佐竹島津より異ならずあはせよ因て氣緩
み病氣却て生ぜり賢人乃語を少し相違あれ
ちと言ひまるとぞ老入雑話

足利將軍義尚へ天性を優うけして武藝のつと
まし和歌よ心を耽り才覺たなりり
はしり高官昵近の公家常に参る時を倣初の
雑談もなく歌法褒貶のみをぞ談せられけると
あむ其頃の和歌の達者某大納言初の歌の状な
ど心やそく指南せられり年二十を過がて
は彼卿却て風情を伺ひけりりと逆賊近隣を掠

めけるよ急ぎ進發しけり時し炎天乃みぎ
りして五萬許の軍兵をめあつせけりが士卒此
暑き堪へりりねて煉汁の如き汗をかき馬る懐
へりり多くり腕腕きけせと人皆仰天天して志ど
ろろなりりにり其處鏡山の麓麓をりけり

大樹將軍の歌よ

今日げり曇せ近江のかぐみ山旅のやほれ
の影の見ゆるよと詠じ暫く木陰陰をりひ少
し程程りりて天曇り涼風かかもも吹来来と志志か
は諸軍勢も中秋夕暮乃思ひをり忽忽ららみ

くが如くを以んば將軍なれどもたゞ
齡壯年又満こばて口惜し事なりと
人々言ひあへり塵塚物語

徳川家康駿府乃城して夜話の時咄の者申しけ
るて當世はど幼少あるものか一事を候
てど古のはかむりもの者此分別より今の
十二三歳の人も勝せり候ふと申しん
を家康の言へり果報のみ人の子ハ
三年なれども三ッはあり昔より世話を以て
尤なる事あり人間老少とも二年相應の體たら

會津葦名
盛氏

とあり先いよきぞと言ひて笑をれりあり
誠は物語は飛越えて未悪しかりのなまされ
ど又不足なり言ふは足らず兩夜の友ト駿府
土産トヲ參取ス
其頃何者の子やうん年齢より遙にあり
童阿弥の者の童法事を度々譽む或時盛氏
其人の地をうつ成らむ言へり其後
果して此子十方におきつけたりぬと
良將の目利は不思議ありと事次をその
仔細を盛氏は問ひけしをさせるとよ何れも
此時のあらむのを譬へて苦きも甘くなり甘き

が酸らがる類之かの童も稚くて成人の者の如
うなるもの成人の程なく老老まらやうもや
がてうつけらあがむと言ふ事か不思議に當て
たるよとて笑ふれりなり 會津四家
合考

武前田晴信入道信玄の幼名を勝千代といひ駿
河の今川義元の室の晴信が姉なりが或時その
母の方へ貝合の為らして蛤を贈る乃ら母より
勝千代方へ女房を使らして此蛤の大小を小性
共と言付けし擇らわささ給てれらあは勝千
代心得申すよとて大きなを擇らてまわさせら

ひさき蛤の疊二疊敷るも塞ぐは高さ凡そ一尺
許りあらんと見えしを小性共と數へさせみる
に三千七百と及ぶ勝千代武功の者を呼集め
此貝の以かほどあらむと問ひけるよ或は一萬
四五千又は一萬の候のわらむと言ふを勝千代
笑ひて扱ひ人数の見立ちより少きものなり四
五千の人を持て何をおさすもすふなり
汝等切々人数を引廻し或は戦場まで敵味方の
軍勢を見積るよ更に中々あらむかす此蛤僅
ちる疊に引散ら刻目の前に積らさく大きな相

違ふを巧りけきを伺候の人々皆口を閉ぢて退
きぬされ勝千代が十三歳の時の事なり
掃聚雜談

前

天文五年丙申十一月武田信虎甲府を發して信
州海野口の城を取巻き日数三十四日しきを攻
めんとし大雪あり故に甲州勢城を巻き
ほぶし同十二月甲府へ歸り然り信虎子息晴
信十六歳の初陣時なりが殿を望みて部屋
住人数三百許あり父信虎が八千餘人あり攻
めあぐら巻きほぶし城を何の手もあぐら乘

取りけりとなり 掃聚雜談

徳川家康或時家老共と咄乃時各小僧三箇條と
以ふ事を心得候ふ也と問はるソゞ其ハ遂に承
りし事無く候ふと答ふ家康は何れに聞候
として物語り或る山寺出家里より一人乃弟子
を取り小僧として召仕ふ所より此小僧或時逃げ
下り親の許へ歸りて言ひける我等事斯様に
頭をすくは候ふらて何れを學問を勤め出
家を遂げ候ふやうにと存じ今まを随分と堪忍
いしめ候へども師匠坊あまや無理あり事

げうを申し折檻の由をいふ事何ぞの續きか
たうして歸り来^やと云ふ親共聞きて夫程迷惑い
ふ事どういふに如何様の事ぞやと問へむ小僧答
へて常々ていふ所を尤も存せむ儀も無く
候へ就中差當り迷惑ふる事三箇條の第一に
師の坊髪を剃り習へて剃らせ候へば我
等剃りたふひの事故の時々の剃刀の先法入ら
ぬとまほしくて血あど出つれを大きに折檻を
らせ候ふ第二の味噌を搦りに搦る様悪しと
て朝夕打擲せられ候ふ第三の用をたりに雪

隠へ参せむ是又雪隠へ行ふが曲事とて折檻に
逢ひ候ふ斯様の次第ありて一生の勤まるもの
て候ふやと言ふを親共聞きて左様の事共あり
ハ其方居たまふ難く存せむ事尤なりと立腹^し
即時寺へ行き住持又逢て山々不足を申立て
小僧を取返さむしと云ふ師の坊聞ていふやう
てさづて沙門の勤めいむづうしとみかなり故
にその身を始^め二人の親共ども何ぞぞ出家を
遂げさせたりと存せむと遂ぐるも希かりに
すしとやうは身あど小僧が以ふを實と思ひ

と物かゝる小僧義を言ふも、心かゝるも、出家の遂がまじき望みの如く小僧をば其許へ返さしむるも、諸檀那方への前も、石三箇條の言譯をなすなり先づ味噌の摺も、わう悪しむる別義も、わらわ寺も在家も味噌を、摺子木も、あを摺るも、あはれさむを小僧も、塗杓子のせなり、摺るも、付き朝夕拙僧世話より申付られ、一因は聞入も、頃日まては杓子の二三本も摺破る候ふも、膳部の脇より取出して見ると、次は雪隠へ行て用をたすを

叱り、何々、是も仔細なり、事なり、各も存知の通り例年代官衆當村へ参らむ、時、定まると、當寺を宿にせらむ、又付き雪隠所遠かて、不自由なり、べしとて地中相談して馳走の爲め、なると、客殿の近所、新ら、雪隠を作り、代官衆饗應の爲に、い、あき愚僧を、誰にて、此雪隠へ行く者なきに小僧一人請取り、に、参らむ、付き度々申付られ、少く、聞入も、又髪を剃り、事出家の勤め、同前なき、で如何様、い、剃り習ひ候へ、とて我等頭を

筆紙よりてぐし手習は剃らるべきをわづし剃り
習ひ此頃ハ已に頭を自ら剃り得る程なり
るは何きゆしと人の頭を手際よく剃る故
此程も我等髪を剃らすれど態と以てし此の如
くは候ふると頭巾を外しむるを見せば何十所
とふふあとも無く切りつり頭内は血留を
け疵薬を塗りつけぬと小僧が親おせを見て横
手を打ら大きに驚き迷惑して段々め訛言を盡
しけるとなりおせを小僧三箇條と云て輕き事
のやうなるは國持大名を始めおし其外家老

用人頭奉行目附横目の役方ど勤むら面々ハ此
心遣ひ肝要なと一方を聞て沙汰は及ぶ時ハ格
別の相違ありたがるものなりと語ふもやうな

岩淵夜話

家康公十三歳竹千代と申し時中間の肩は乘
り五月の菖蒲切を見物は出でらる一方ハ人
数三百程一方ハ百五十程にけりて見物の人
ハ少人数の方負けとて大勢の方へ立寄りぬ
ハ有し竹千代を肩は載せしる中間ハ多き方
立寄せば竹千代何れ我を皆人の行方へ連

りどろしきほど少き者共が大勢を見大かして
出張て居る能く大勢を弱しと思ふさなき
ば両方お合ふ時小勢の方より助勢は如何様
唯今叩合ふたふで少き方勝つて少き方
へ行て見物せよと言ふは供の者供腹を立
て知らぬ事か宣ひとて無理よあなぬは留ま
る案然如くお合ふ時に人の少き跡を大勢駈
けつて新手を以て勝ちけきを初め大勢
方負けてげつと散りにけり見物の人々も我先
はと逃走る竹千代を見て肩を載せり

中間の頭を叩きて咲もれり虎生三日有食牛
機と云今家康公と名を呼ばれ海道一の弓取な

甲陽軍鑑

森蘭丸ハ三左衛門可成の次男あり隠せあり美
少年あり織田信長の寵愛の小姓あり或時御座
の間の窓の蔭をからせと申付らる蘭丸承り小
さ竹の枝を持ち蔭の衝上の上ハ子供のせいよ
及ぶと見えぬ故に延上りかひ竹をささぐ
しみるよ大茶碗の水一盃入し蔭の衝上の上よ
踏物をし其茶碗をからし扱部

をかろき若し其心入あくくしと節をかろくたを
て茶碗も落ちてわき水の翻せ不首尾ありと
念を入せし事浅かきと蘭丸の作法
をたゆみ^玉として信長公があしあせし事
あり斯様に神妙なる仁りて武勇の器量もあり
し故に十六歳より五万石の領所を下されし
あり武隠業話

長尾六郎敗軍して越後の米山へかゝり府内へ
退く長尾景虎真先は追討に進み米山東坂より
言ふよ何とくく殊の外ねあき間暫し休

てお立つしと小家は入て眠る宇佐美駿河守
これを見て是は如何ある事と候ふり今敵を
追立つる事ハ竹を破り如くその勢失ふべし
と米山を超越えし頸城郡へ打出で府内の城
乗取とて候ふ早々打出と促せし景虎
はわむしとて高軒かいて卧す駿河守様々よ意
見されし聴かざりて卧志居る故に皆々了簡
もあし運の極と云ふお景虎の敵の人数米山峠
を三分二程越えしと思ふ時分は早貝を吹く
せし打立ち米山へ追上る案の如く敵は下り坂

越ゆる處一追付き敵の人数亀破坂より追落
され死する者数を知らず後宇佐美諸人は向
て今日景虎米山坂より逃ぐるを追てどしと眠
せらる各合點せし也と問ふ皆合點せずと答
ふ宇佐美が云ふ府内勢米山へ逃上り時あせを
追て若し敵は返さず時山高は敵を受けて
追返さず事必定あり景虎其段を積て眠り真
似して登り坂に敵を登せ濟まし下りて越ゆる
時分を追討たせしり我若年より数十度の事
逢ひりりその積り無きは景虎十八歳まで

此智慧の佛神の化身かと存じ候ふと言ひま

ぞ武徳業話

常陸の下館の水谷家にて或時中間二人結城へ
飛脚を遣りけるまかの二人は布一段買取り
しを此代我出さし又某出さしけりとして互に争
ひ止む事あり終に奉行の裁許を及びけるが理
非分明あらずとて双方分け取れと了簡す主の
王若丸聞きて二人を庭前へ呼び出さし二人は
布の両端を束て引合し力だめしと引取
せらる者こそ勝あれと言ふ二人是非なく布の

事奇妙して天性を得たる所は幼少より知り
事あり 古人物語

天正の頃下総の千葉家の家老は原といふあり
又原が家来は酒井といふあり 天正十八年関
東徳川家の領地となりて後原が子の吉丸酒井
が子孫金三郎徳川家奉公を望みて召出さる
或年伏見の普請の時家康公坪の内へ出でられ
し 事あり 當番衆各供して出づ 吉丸は主の腰物
を持らし 故は草履をけきま行らんと成らず 志
て素足して炎天は敷栗石の上まつらばひ居け



